＼没後120年／

下関人なら知っておきたい！

三吉慎蔵

坂本龍馬の親友として知られる三吉慎蔵は、激動の幕末から明治の新時代を生きた下関の人物です。多くの人々から厚い信頼を寄せられた一人のサムライに迫ります。

Shinzo Miyoshi

【1831-1901】

長府藩士・小坂家に生まれ、後に同藩士の三吉家の養子となります。
藩政時代は要職を歴任。
寺田屋事件で、坂本龍馬と九死に一生を得て以来、慎蔵と龍馬は親友となりました。
龍馬はほどなく落命しましたが、慎蔵は長命で、維新後は宮内省に勤め、北白川宮家などに仕えました。
しかし、慎蔵の念願は長府毛利家で、主君を支えることでした。
還暦で長府に戻ることができた慎蔵は、亡くなる直前まで長府毛利家繁栄のために心血を注ぎました。

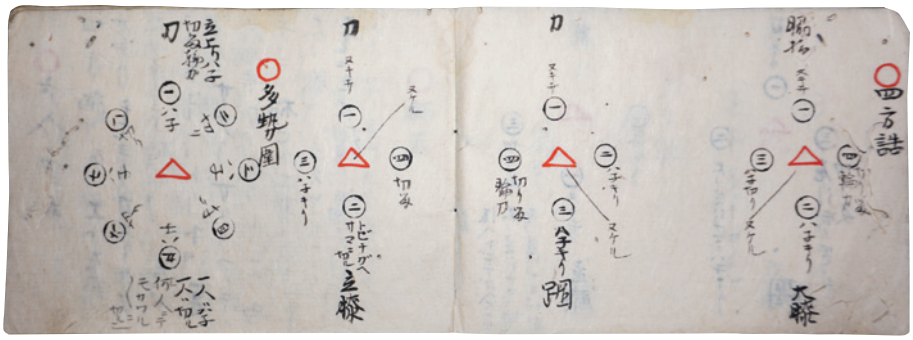
❶坂本龍馬の親友！

▼ 三吉家に伝世した坂本龍馬の写真

伏見の寺田屋に宿泊していた慎蔵と龍馬を、伏見奉行所の捕り方が襲撃。
龍馬は慎蔵の肩越しから銃撃して、捕り方を倒したものの、切りつけられて手を負傷します。
二人は捕り方の隙をついて、寺田屋を脱出。慎蔵は旅人に扮して伏見薩摩屋敷へと走り、龍馬の救護を要請し、龍馬は助かりました。
その後、龍馬は遺言で妻とその妹を託すほど、慎蔵に信頼を寄せます。
遺言のとおり、慎蔵は二人を引き取り、しばらくの間、下関での生活を支えました。

❷文武両道

▼ 今枝流奥義覚書 小野行邦

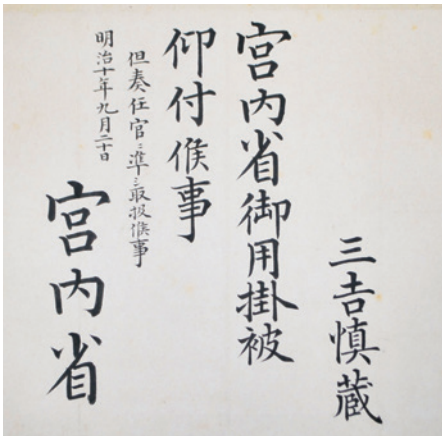


慎蔵は7歳（数え年）で実父に入門し、今枝流の剣術稽古を始めました。
他にも各師範に入門するなど、幼い頃から武術をたしなみ、宝蔵院流槍術を極めるため、19歳で萩に留学。
武術の習得に偏ることなく、萩藩校明倫館に通いながら、文学の師にも入門し、文道の研さんも積みました。

❸仕事と家庭を両立！

▶ 宮内省辞令

廃藩置県後、当主毛利元敏の求めに応じて、慎蔵は東京に移住します。
長府毛利家の東京生活を支えていましたが、突如「宮内省御用掛」「北白川宮家御附」を命じられました。
在京中の慎蔵は仕事に追われながらも、妻との菊花鑑賞や曲独楽（きょくごま）見物、長男の留学支援や、長女の進学対応など、家族のために過ごす日もありました。



宮内省御用掛被仰付候事
但奏任官ニ準シ最級候事
明治十年九月二十日
宮内省
三吉慎蔵

三吉慎蔵没後120年記念 ＼さらに詳しく／

歴史博物館特別展

誠之（これまこと）　三吉慎蔵

幕末・明治を生きたサムライ

期 11月12日（金）▶▶ 12月26日（日）

歴史博物館　☎241-1080

三吉慎蔵をさらに詳しく知ることができる特別展を開催します。
龍馬からの手紙や初公開の終活資料も必見！
料一般400円、大学生等200円

関連講座

①「三吉慎蔵の生涯　幕末編」
11月24・27日
②「三吉慎蔵の生涯　明治編」
12月8・11日
③「三吉慎蔵の生涯　特殊任務編」
12月15・18日
※①～③共通
　午前の部　午前10時30分～11時30分
　午後の部　午後1時30分～2時30分
※各回とも内容は同じ
所歴史博物館ガイダンス交流室
師①②稲益あゆみ（歴史博物館学芸員）
　③古城春樹（歴史博物館館長）
定各回20人（要予約・先着順）
料300円
申11月3日（水）午前9時30分から直接か電話で、歴史博物館へ。

クイズラリー
Shinzo Quest

歴史博物館の展示室や博物館周辺の施設などを巡ってクイズに答えた方に、歴史博物館のオリジナルグッズをプレゼント!!
ルートは2種類。
2つのルートを巡ると、2つのグッズがもらえますよ！

自分に厳しく、他人に優しく。目立たず、騒がず、仕事は堅実。多忙な中でも、家族に温かいまなざしを注ぐ三吉慎蔵の人柄は、魅力的です！

学芸員　稲益あゆみ

❹65年間に及ぶ日記

▼ 三吉慎蔵日記

慎蔵は、65年間に及ぶ日記を書き残していました。
日記には、幕末は動乱の渦中の出来事、明治に入ってからは華族たちの日常・非日常の様子や、家族の出来事などが記されています。
そのような中、娘が亡くなった年だけ、日記は存在しません。

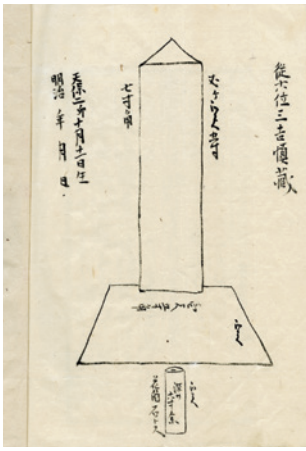
❺真心を大切に！

▼ 三吉家家訓

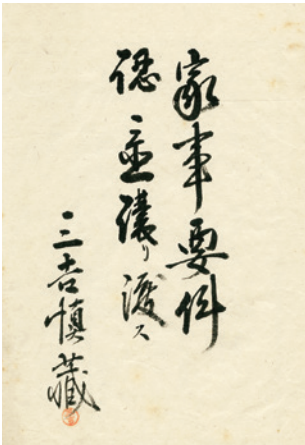
「誠者、天之道也。誠之者、人之道也。（誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり）」という言葉から採用したと考えられる家訓。この「誠」とは、真実で無妄（道理を外れない）であることを意味します。
慎蔵は、常にこの言葉を胸に抱き、真心をもって人や物事に当たったものと推察されます。

❻見事な終活！

▼ 死去始末



▼ 家事要件



慎蔵は自らが他界したときの対応を「死去始末」にまとめました。役場への死亡診断書の提出に始まり、棺のランクや会葬返礼品、お墓の形状まで記しています。
また、「家事要件」では遺訓や、遺品を記しています。
亡くなる8年前の明治26年には毛利元敏の勧めで、功山寺の長府毛利家墓所の傍らに墓地を購入。
明治34年に体調を崩し、永眠しました。